

## アビダルマ仏教から「大乘」仏教へ — 聖典解釈論の観点から —

本庄 良文

「部派」仏教からいかにして大乘仏教が興起したかの問題は、インド思想史上の最大級の難問である。たとえばアビダルマ仏教の資料も、大乘仏教の資料も、多くの場合、大乘仏教興起からかなり後の形態によってしか現在に伝えられていない。また前者についてはごく一部の部派のものしか伝わっていない。にもかかわらず、両文献群は途轍もなく膨大である。

しかし、そのような困難の中でも、仮説を基にこの問題に挑戦することは必要であろう。そこで、十年近く前にまとめたもの（春秋社、シリーズ大乘仏教2）であるが、「仏説論」「聖典論」の観点から、この問題にアプローチしてみたい。

第一に、平川彰による総括に従い、大乘仏教に継承された教義・理論が、特定の部派に偏るものではないことを確認したい。第二に、第一点に関連して、大乘教徒が大乘仏典を作成するにあたって、部派仏教の三蔵すべてを利用することができたのではないかと、その推測のもと、その理論的、教团的環境を論じてみたい。第三に、大乘教徒が新しい経典を何らの「うしろめたさ」なしに釈迦の直説（仏説）として作成し、それを自ら深く信じ、他に信じさせただけでなく、仏説であることを否定する部派仏教徒の保守的な部分に向けて「謗法」の罪と墮地獄の報いを負わせることのできた理論的背景を推測したい。第四に、部派仏教から大乘への橋渡しをしたと言われる譬喩者・経部について言及したい。すなわち単にアビダルマと大乘仏教との関係を述べるにとどまらず、広く部派仏教から「仏説」として大乘仏教が興起したプロセスについてのアイデアをも提供できればと思う。